

野外学習の指導理念

原 幸 宏

1 野外における学習活動の意義と問題点

一般に屋内での学習と対比される野外学習は、フィールドを基盤にした見学・観察・実習・調査などを単独あるいは複合的に重点をおいて、臨地で展開する学習形態に特徴がある。その意味において校外学習・社会見学・野外観察・野外実習・巡検・フィールドワーク(野外調査)などと、さまざまな呼称で実践される。重点をいずれにしておくにしても、学習の主体者である生徒にとっては、自然や社会事象と直接的・即物的にあるがままの生きた教材と関わりをもつことが出来るために、興味を抱き、関心の度合いも室内学習と比べて高く、認識が深められる。一方、指導する側の教師には、意図する指導の効果が期待出来るばかりか、自己の研修の機会ともなり指導者としての自信が深められる。

このように、野外における学習活動の意義は大きいものの、野外学習の計画・実践にはさまざまな隘路がある。殊に、一定の授業時間の枠を越えて設定する場合、そのための時間確保や指導援助する教師への依頼など、他教科に及ぼす影響が小さくなく、そうした配慮しなければならない校内問題に加え、交通事情・事故防止のための安全上の問題・見学先などの渉外関係にも万全を期さねばならないからである。

このような実施にあたって当面する諸問題を打開して、野外学習を定着させ、学習の成果をあげたいものである。ここでは、実践を通して野外学習の在り方を考察し、今後の検討材料としたい。

2 野外学習の設定とその指導理念

「地理」学習における指導計画のなかで、野外学習をどのように位置づけるかについては、野外学習に対する認識から指導理念を導き出して、これを実践する方法から裏づけたい。すなわち野外学習は、そのフィールド(学習の場)を通して地理学習の手法を会得させるいわば方法概念と、地誌的ないしは主題学習を把握させる目的概念との二面性を有機的に満足させるものでありたいとする認識であり、野外学習によって得た生徒の学習経験を、その後の室内学習において可能な限り、指導の任にあたる教師が応用・発展させたいとする指導理念である。

従って、この指導理念の根底には直接経験主義があり、これと主として文献資料による室内学習(間接経験)を学習過程の展開において、相互に補完ないしは関連させようとするものであって、ここに方法概念が機能する可能性を見い出そうとするのである。

このような野外学習に対する認識から得た指導理念にたてば、野外学習の設定は、「地理」学習における指導計画のなかで最初に位置づけるのが妥当と思われる。そして、方法概念を充足させるためにも一定の事前・事後の学習が必要であり、そのための授業時間には少なくとも6時間を配当させたい。加えて一定量の内容を授業以外の課題学習として組込む方法も必要となろう。そこで、実際には野外学習の設定を4月下旬とし、野外学習それ自体は授業時間6時間相当の「1日」を当て、そのための事前学習に4時間、事後の学習には2時間、レポート作成を課題学習とする。

事前学習では、フィールドとなる地形図(2万5000分の1)と地勢図を主要な教材の一つとして、空想認識を深めることに主眼をおく。具体的には、一定の地点間の距離の測定(縮尺)、時速からの所要時間の算出、鉄道や通行する道路の起伏状況の把握(水準点・コンター)、標高や傾斜度の計測(コンター・縮尺・三角函数)、集落分布の形態と配置(黒描や地形図記号)河川など水系の分布、工場や公共機関の立地状況(記号と注記)、農用地や林地の状況(記号)など、土地がどのように利用されているかを作業学習を中心に考察させ、読図力を養うことを意図する。一方、野外学習の目的をはじめ、学習内容・方法・行程・携行品・事前の準備などについては、フィールドノートを用いて明確化することによって、各自が問題意識をもってフィールドに臨むように事前学習の意義づけをする。

事後の学習では、野外学習を実施したことを受けて、そのまとめの意味で内容を整理し、地理的認識の定着化をはかる。典型的な地形と集落形成や土地利用など人間生活との関係、人間の自然への働きかけによる改変状況——市街化地域の発展、用・排水路、河川改修、道路の拡幅・建設、農用地の利用——、モータリゼーションと交通・通信ネットワークの現状、都市近郊地域の農業、立体都市化の現状、工場分布と配置など、野外学習として選定したフィールドの範囲にみられる地理的諸事象の要約と、その再検討を行うこと

によってレポートを作成する構想の素地とする。また、レポートを作成する基本的な事項 — 表題のつけ方・文章構成・図表など資料の作成と添付の仕方・参考文献の付記 — を示唆し、最終的にはレポート作成に集約させることを重点にする。実際の作成は、課題形式をとり、そのための期間を約2週間とする。

3 野外学習実施上の留意点

事前学習において示唆した着眼点と車窓景観とが結びつくように現地で解説する。そのためには、地理的な重点事項を整理しておき、総花的にならない配慮が肝要である。この場合、景観を地理的に観察する「見方」を養いたい。例えば、他地域との関連に言及することなども留意したい。解説に一定の時間を確保して臨地において考察させたい事象の場合は、主題学習として下車地点に選定して、いわゆる「考え方」を養いたい。その場で理解し、納得する説明が望ましく、関心を高めるために問いかけを伴う説明でありたい。それに連動して興味や疑問が増幅するような配慮として、

現地で直接携っている当事者に解説を依頼するのも便法であり、学習効果をあげる有力な手段である。下車地点では必ずメモをとり、眼や耳だけでなく身体全体で学習する態度と実践を重視したい。こうした場において、事後のレポート作成の素材が蓄積されねばならないと考えるからである。限られた時間で充実した野外学習を実践しようとするのであるから、指導する側の教師による事前の研究・調査が必要であることはいうまでもない。複数のクラスが同時に野外学習を実施する場合は、他教科・科目、例えば歴史・地学などの担当教師と協調して、一定の時間区分によって対象生徒の接し方にローテーションを組むのも一つの方法であり、すべてのクラス生徒に画一的な指導は不可能であるし、また、その必然性もないといえよう。